

## シンポジウム

## 偶然・必然・自然

## — 形象の生成と認識をめぐって —

## 開催趣旨

古来より芸術家伝説では、偶然に見いだされる形象を自らの造形の骨格として展開させる事例が知られてきた。本シンポジウムでは、古今東西の事例を参照しつつ、このような手法が、どのような美術史上の意味や機能を担ってきたのかについて、私たちが生きている現代の美術の動向も視界におさめながら議論を深めたい。

\*\*\*

壁に広がる染みを凝視することで想像力をたくましくする訓練をしていたというレオナルド・ダ・ヴィンチの手稿が伝える逸話は、芸術家の並外れた想像力とともに、意味のない壁の染みから具象性のある絵画を仕上げるために必要とされる芸術家の卓越した構想力や技術の重要性を喚起してきたことで、よく知られている。

中国や日本でも偶然の形象をとりこんだ制作の逸話が少なくない。8 世紀末の中唐に活躍した王墨は、大画面の絵絹に身体を投げ出すような狂逸なパフォーマンスによって痕跡を留め、そこから水墨山水を作り上げて逸品という評価を獲得した。瀟湘八景を創始した北宋の宋迪は、敗れた壁に絵絹を貼り付けた枠をたてかけてそれを朝夕観察することで、水墨山水に天趣を宿らせることを説いている。王墨の偶発的な痕跡も宋迪の敗壁の事例も、レオナルドの壁の染みと同じく、予測や計算のできない偶然の形象を出発点とし、それが具象性をとまなう山水画へと展開されていく事例である。

江戸時代初期の本阿弥光悦は、新築したばかりの家を訪れた松花堂照乗がまだ乾ききらない壁の凹凸にあらゆる山水鳥獣の形象を見いだして描き留めたことを回想している。器物の思いがけない形態や肌合いを観察し、そこに景色を読むことは、大小の宇宙が融通無礙に通じているとする茶湯文化の世界観と無縁ではないが、光悦や照乗が見いだした世界もまた、偶然に見いだされる形象が、東西美術の創作や鑑賞において古くから無視できない意義を担ってきたことを伝えている。

さて、今日私たちは、20 世紀以降の美術の展開を視界におさめ、偶然に見いだされる形象を自らの造形の骨格とする美術として、とくにダダやアメリカの抽象表現主義、フランスを中心とするアンフォルメル動向を広く共有している。偶然に見いだされる形象に触発され、それを展開させた抽象的なアートは、身近な光景となって美術館の内外にわたる場で壁面を飾っている。時としてこうした抽象的形象の作品には、何らかの意味作用を喚起するタイトルが付され、偶然の形象を具象の形象へと変容させる過程を観者に委ねている事例もある。作り手が志向する抽象的な偶然の（あるいは偶然を装った）形象は、観者によって

---

具象を帯びた必然の形象として認識される過程をも内包することで、抽象と具象、偶然と必然との間を往還し、その双方に開かれた未決の状態自体を新たな作品の存在様態として獲得しているかのような場合もある。

\*\*\*

これまで述べてきた東西の事例は、周知のように早くは芸術家伝説としてエルンスト・クリスとオットー・クルツがとりあげ（1934年）、その後、エルヴィン・パノフスキーやエルンスト・ゴンブリッジ、さらにダリオ・ガンボニーらが議論を展開させてきた。日本東洋の事例については、島田修二郎による「逸品画風について」と題する論文を嚆矢（1951年）とし、1980年代以降、水墨山水画の発生と展開にかんする研究をとおして議論が深められてきた。

今日、日本発の具体美術協会をはじめ中国出身の芸術家によるアンフォルメルやスペクタクルによる実践が注目を集め、これらの現代の美術についても従来とは異なるアプローチがはじまっている。1873年のウィーン万国博覧会への出品が契機となって美術という翻訳語が創生されてから150周年を数える2023年にあって、東西のみならずグローバルに展開する現代の美術の観点をも包摂しながら、偶然や偶発性を標榜する形象が担ってきた意味や機能を議論することは、美術史学会全国大会におけるシンポジウムのテーマにふさわしい今日の意味があると考えている。

偶然か必然か、自然は、そこに如何に関与しているのか、さまざまな事例を踏まえながら、積極的な議論が展開されることを期待したい。